

## 哲西の道しるべ

哲西民俗研究会

哲西の道しるべについて、紹介しましょう。

哲西には、多くの道しるべが残っております。

備後方面の東城・栗田・小奴可・千鳥・小串、  
伯耆方面

上市・新見・川の瀬・

田淵・本郷・

吹屋・成羽・高梁など行き来するには、どうしても山を越えなければなりません。

山の上に登って行くにしたがい、家がなくなり、道を尋ねることができなくなります。

そういうことから道しるべが必要であったのかもしれませんが。

物資の集散地の川の瀬、吹屋方面に行く道しるべ

信仰に関する一畑、大山、帝釈天、太山寺、町内の三光神社、  
金毘羅宮の参詣、参拝に関する道しるべ、

馬頭観音、阿弥陀仏、地蔵などの石仏を兼ねているものなどがあります。

昭和47年発行の文化財シリーズ「哲西の道しるべ」

平成12年発行の文化財シリーズ「哲西町の路傍の石仏」によりますと

哲西には、上神代地区 8か所

矢田 6か所

大竹 4か所

畑木 4か所

大野部 11か所の 33か所あります。

これ以外にも道しるべがあるかもしれません。

## 東城往來の道しるべ

下夕  
市岡  
馬場  
四回市上  
住吉  
二本松

はじめに、東城往來について紹介しましょう。

上神代から東城方面に行く道です。

これは、現在の国道182号線とほぼ並行、また、同じところを  
通って二本松に至る道です。

明治40年夏、若山牧水が郷里の宮崎に帰る途中、新見からここ  
を  
通って二本松の熊谷屋に泊まったとされる道です。

この街道は、平成8年に哲西町の教育委員会で、実地調査をされ、  
「牧水街道調査」という報告書が作成されております。

上神代から二本松までの旧街道沿いに9か所あります。

それでは、上神代にあるものから順に紹介します。



これは、下タの道しるべです。  
 旭部落と下タ部落の境あたりにあります。  
 これより 右は、みまさか道  
 左は、だいせん道  
 この道しるべは、寛保元年8月ですから272年前に武坂利衛門という人が建てたものです。  
 昭和53年に新見市の文化財に指定されています。



市岡の道しるべです。  
 下タの道しるべとごく近くににあります。  
 これより 左 大山道  
 これより 右 みまさか道  
 元禄6年9月吉日とありますから320年前に建立されたものです。  
 哲西で年号の入っているものでは、一番古いものです。  
 みまさか道は、見坂山の麓の武坂峠を越えて、坂根に出て、新市から苦坂を越え、上市、新見を経て美作にいたる道です。  
 大山道は、ここから左に進み、勧請峠を超え、干子、京坊峠を越え、油野、上石見、溝口に出て、大山の下山智明権現に参拝し、牛馬安全の祈願をしたものです。  
 昔は、大山参りといってこの道を行き来したということです。  
 ごく最近まで牛を飼育されている農家の方は、毎年お参りされてきました。  
 市岡には、昔、鍛冶屋があつて伯耆産の玉はがねを使って、刀を鍛えていたということです。  
 昭和53年に新見市の文化財指定されています。



近くに市岡阿弥陀堂があります。  
 ここでは、新見市指定の文化財の「虫送り祈禱」の行事が、毎年7月に行われます。  
 土用念仏の大数珠回しも、おこなわれています。  
 お参りした人たちは、無病息災、家内安全、五穀豊穰を祈願されます。



次は、馬場にある道しるべです。  
 旧国道から別れたところの金毘羅宮の参道の鳥居あった所です。  
 今は、鳥居は金毘羅宮下の石段のそばに移転されております。  
 右 こんひら宮 これより 6丁とありますから  
 およそ650メートルです。  
 左 大山 新見 上市道

備後神石郡西油木村 岡利三郎が立てたものです。



馬場から金比羅宮参道に移転された鳥居

馬場の参道から移された鳥居のある金毘羅宮下の石段の下です。

祥光寺は、讃岐の善光寺の末寺として、永享元年に建てられたものです。今から584年前のことです。

金毘羅宮は、讃岐琴平の金毘羅宮の分霊を境内に祀ったものだという事です。

旧暦の毎月10日が縁日で、特に3月10日は、近郷から参拝する人が多く、新見、熊谷方面、帝釈、油木方面、小奴可方面、上石見方面から人の流れが続き露店、のぞき、見世物が参道や境内に並んでにぎやかだったということです。

私が子供の頃も新見や東城から臨時バスや臨時列車が出て、到着する度に駅から人が続いていたのを覚えております。



昭和11年頃の観音堂

これは、金毘羅宮の観音堂で、この写真は、昭和6年頃矢神村が発行した絵葉書の1枚です。

今は、新見市の文化財に指定されております。



昭和16年頃の3月10日風景 農機具の実演

昭和38年発行の哲西史に掲載されている3月10日の縁日の写真です。

鳥居前の田んぼで農機具の実演が行われました。



昭和32年頃の縁日

昭和32年頃の3月10日の縁日の様子です。

昭和47年7月の集中豪雨により災害で仁王門が流されてしまいました。



これは、畑木の四日市上の沢田さん宅の裏の三叉路にある道しるべです。



右は、東城  
左は、八鳥



八鳥には、新見市指定の文化財「西山城跡」があります。  
西山城は、平家が滅亡する鎌倉前期の文治元年（1185年）、源頼朝の命により家臣の市川行房が野馳の郷に使わされ、築城したと伝えられています。828年前のことです。



また、八鳥の明本寺境内には、新見市指定文化財の「歯痛地蔵」があります。  
歯の痛みを止めてもらえるお地蔵さんとして親しまれています。



次に、畑木住吉の道しるべです。  
この辺りの国道は、旧道が拡幅されています。  
左 新見道  
右 松山道  
願主 彦助  
文政11子五月 日とあります。  
ですから185年前に彦助という人が建てたものです。

東城から来て、ここで道が分かれ、  
左に進めば、新見、美作に行くものと  
右に進めば、八鳥を経て松山、今の高梁へ行く道です。



これは腰折れ地蔵です。  
 この辺りを腰折れといい、戦国時代毛利の軍勢が、岸本城を攻めたとき、岸本方は弓を射て応戦しました。  
 岸本方の放った矢が毛利方の大将に当たり、馬から落ちて腰を折って戦死したということで、  
 それで腰折れといい、付近に地蔵を祀ったという、腰折れ地蔵伝説があります。



これは、二本松の妙伝寺下、二本松牧水公園のそばにある道しるべです。  
 ここには二つの道しるべがあります。  
 一つは、右 太山寺道 21丁 ですから約2.3キロ位です。明治41年10月10日とあります。  
 若山牧水が熊谷屋に泊まった翌年ということになります。  
 施主は、備中国阿哲郡神代村 西川治太郎とあります。



もう一つは、右 太山寺二十一丁とあります。  
 左は、東城とあります。  
 太山寺は、皆さん方がよくご存じかと思いますが、市頭の山上の曹洞宗のお寺で、現在は無住のお寺のようです。  
 昔から安産祈願の寺として、備後・備中からお参りの人が多く、安産のお札をもらって帰ったということです。  
 お産の時も太山寺の方向に向いて祈ったということです。  
 二本松峠からは、福代に出て、山道を登っていけば、東城の町から行くよりも早かったということです。  
 左に進めば、福代、岩瀬戸、市頭を経て東城町に出ます。  
 東城の町には戦国時代、宮氏が五品獄城を築いてから、城下町として栄えました。  
 西の帝釈には、帝釈天を祀る永明寺があります。  
 国定公園帝釈峡には、旧石器時代から縄文、弥生時代の遺跡が多い。



太山寺の前の三叉路には道しるべがありました。  
 道しるべには、右 備中道  
 左 粟田 伯耆  
 東城町 横山平吉 とあります。  
 太山寺から出て、右に行くと備中道  
 左に行くと粟田・伯耆方面ということです。  
 太山寺は、安産祈願の参詣者が多かったことが、この道しるべからもうかがえます。



熊谷屋敷跡は、二本松の牧水公園です。  
昭和53年新見市の文化財に指定されております。  
屋敷跡には、若山牧水親子三人の歌碑が建立されています。  
中央に牧水の歌碑  
右側に喜志子夫人の歌碑  
左側に長男旅人氏の歌碑が並んでいます。



昭和39年11月の牧水歌碑除幕式です。



昭和49年11月の喜志子夫人の歌碑除幕式です。



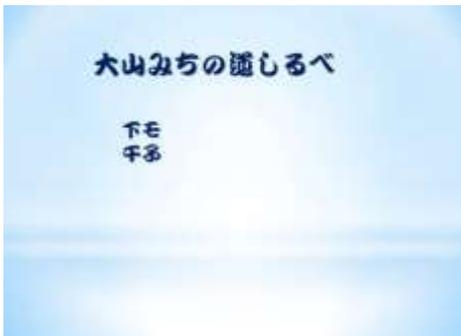
昭和52年11月の長男旅人氏の歌碑除幕式です。



平成19年10月の牧水歌碑の除幕式です。



国境には、国境標があります。  
 これは、昭和53年新見市の文化財に指定されております。  
 この国境標は、江戸時代に作られたもので、  
 新見市側の標石には、表に「従是西 備中国」、裏には「哲多郡大竹村」とあります。  
 この標石は、一時良神社の境内に移されていましたが、元に戻されています。  
 庄原市側の標石には「従是西 備後国」、「従是東 芸州領」と彫られています。  
 これは、東城の徳了寺にあるということです。



それでは、もう一度上神代の下夕組まで戻っていただきまして、伯耆往来。大山みちについて紹介いたしましょう。  
 伯耆大山は、牛馬安全の神様で、牛馬市が開かれ、信仰する人や牛馬商がよく大山上りをしたものです。  
 また、美保関の美穂神社にもお参りしたものです。  
 矢田からは、馬場、浪方、桑本、市岡、干子に入り、京坊峠を越して、上油野、吉田、高瀬、野原、上石見から神戸の上、黒坂、二部、溝口あるいは江尾から大山に上る。  
 大山に上らず、美穂神社参るには、上石見から、下石見、生山、法勝寺、米子、美保関に出ます。  
 大山の向こうに赤松の池というのがあります。  
 昔、日照りの年には、雨乞いのため、5升ダルに酒を入れて、水をもらいに行ったという池があります。  
 大山道の道しるべは、下モと干子にあります。

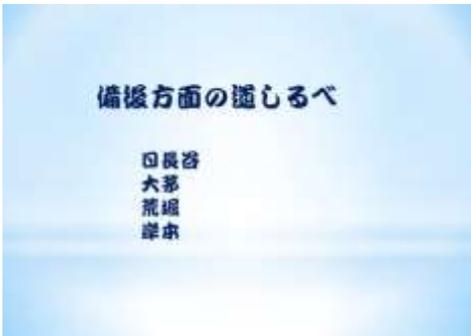


上神代 佐藤組の勧請峠にある道しるべです。  
 明治22丑3月吉日  
 右ハ 一畑道 酉年 男 とあります。  
 市岡方面から来て、この峠を越えて、干子に入り、京坊峠を越えて油野、野原、上石見を経て、米子へ、西へ進めば一畑薬師に通じる。  
 上石見から溝口に出て、大山の下山智明権現に牛馬安全の祈願をされる人もあります。  
 大山の下山智明権現をここへ勧請して祀ったということから勧請峠というものですが、  
 この道を往来する商人が、ここで一休みして、売上金の勘定をしていたことから勘定峠という説もあります。  
 銭勘定しているとき、おいはぎに出会い売上金を全部とられた、とう話も残っています。

	<p>昭和53年新見市の文化財指定されています。</p>
	<p>大山下山智明権現を勧請して祀ったという大山神社。 毎年地元の部落が交代で、当番を務め祭りが行われております。</p>
	<p>これは、丁度この神社の下あたりにあった「狐穴たたら」の遺構です。 平成12年度中山間地総合整備事業による佐藤地区と油野地区を結ぶ農道整備計画が策定され、古代吉備文化センターにより発掘調査が行われました。 この土壙は、製鉄炉の下部施設の石組と考えられ、壁の焼けた炭を含んだ、石も高熱で赤く変色しています。</p>
	<p>干子にある道しるべです。 黒坂、上石見方面から京坊峠を越して来て、ここで道が分かれ、左に進めば坂根に出て、釜谷、哲多の田淵、矢戸を経て吹屋へ、また釜谷から宮川内に出て、川の瀬の船着き場にも出ます。 右に進めば、先ほどの勧請峠にのぼり、市岡を経て、金毘羅宮のある矢田に、さらに東城、帝釈に出るものです。 昔は、帝釈天を祀る永明寺へ参詣・参拝する人も多かったようです。 帝釈天は、生存中に参っておかないと、死後、湯灌までの間に7度参らなければ極楽往生ができないといわれていたということです。 矢田の金毘羅さんは、旧暦の3月10日が縁日で、今は4月の第3日曜が縁日となっています。 帝釈天の縁日と金毘羅さんの縁日には、干子の道には油野や伯耆から参詣・参拝の人が連なつたという。ことです。 昭和53年新見市の文化財指定されています。</p>
	<p>これは、京坊峠を超えると油野に出ますが、途中に「京坊たたら」がありました。 ここも、狐穴たたらと同様に、平成12年度中山間地総合整備事業による農道整備のため、発掘調査が行われました。 この写真は、発掘調査により発見された、製鉄遺構の下部構造です。 遺構の下層から縄文時代の土器が発見されています。</p>

中国地方の近世以降の製鉄法は、砂鉄を木炭の熱によって還元反応させることで鉄を取る方法で「たたら吹製鉄法」よばれております。

この製鉄法は、以前の製鉄法とは比較にならないほど生産力が向上しているということです。



今度は、備後方面への道しるべです  
出雲往来について紹介しましょう。

出雲大社は、古くから地方のものが崇敬する神様で、奥参りと言ってよく参ったものです。

今でも出雲大社には、大勢の方がお参りになっておられます。

上神代からは、虫原峠から小串、千鳥、内堀、小奴可、出雲というルートでお参りされておりました。

矢田からは、荒堀、倉木、から粟田に出て、千鳥、小奴可、三井野原、三成、出雲に出るというルートです。

三井野原には、稚児が池という池があり、昔、日照りの年には、雨乞いのため、5升ダルに酒を入れて、水をもらいに行ったという池があります。



これは、日長谷の綱の牛王神社前の道しるべです。

ここには二つの道しるべがあります。

一つは、右は 三光山口  
左は びんご



これも同じく綱の牛王神社前の道しるべです。

右 三光  
左 うぐし

三光というのは、三光山の麓に三光神社あり、この参詣、参拝につながるものです。

三光神社は、いくさの神で、徴兵除けの神とされ、徴兵検査で合格しても、くじで免れた者もあったということで、備後方面から参拝者が多かったということです。

備後の小串は、これから左に進み虫原谷を登り県境の虫原峠を越え、西に下ると小串、千鳥、内堀、小奴可に出て出雲に行きます。

この道しるべは、明治12年に金藤金蔵という人が建てたものです。



網の牛王神社には、昔から毎年12月のはじめ、新しいわらで作った大蛇を供える蛇型まつりの行事が行われております。

日長谷の枝谷の虫原谷の奥に大蛇が棲んでいて、牛や馬を食ったり、作物を荒らすので村人は、困っておりました。

九品寺の坊さんが、大蛇の害を心配し、神仏の力をかりて、大蛇を祈り殺そうと千本の樺の逆杭を谷一帯に打ち込み、七々49日の間お経を唱え続けた。ということです。

そうすると、大蛇はたまりかね谷をのた打ち回り、社のあるところで息絶え、九品寺の坊さんは間もなく大病で死に、寺も廃寺となった。ということです。

その後、谷川の水に毒気が含まれ牛や馬、人に害を及ぼすようになり、大蛇の霊を鎮めるために社を建て、わらで作った蛇を祭って霊を鎮めたという。ことです。

これが蛇形祭の由来で、古く鎌倉時代(700年前)から続く奇祭で。わらで作られた大蛇は長さ6m、重さ約38kgになる。いう。

12月の第1日曜日に行われます。



朝早くから虫原部落の総出で近くの集会所で、大蛇を編む男衆と、勝手でご馳走作る女子衆に分かれて作業が始まります。

今は、部落の人数が少なく、男女に分かれることなく行われているようです。



大蛇ができると神職によるお払いがあり、かついで神社まで運びます。今は車で運ばれているようです。

大蛇を棒杭に掛け、お祭りが始まります。



少し上流にいくと、三光川沿いに、市の指定文化財のヤブツバキ群落があります。

昭和30年頃までは、ツバキ油をしぼっていたということです。

大蛇退治に千本のツバキの逆杭を打ったと伝えられてますが、その名残のツバキではないでしょうか。



上神代大茅の道しるべです。

右 おぐし ちどり

左 あわた

元治2年の建立（こんりゅう）ですから148年前のものです。大茅には、銅鉱、硫化鉄鋼、クローム鉄鋼などが産出されました。

これらは、馬の背に乗せて吹屋のベンガラ工場に運ばれました。

銅山には、大勢の人が働いており、備後との交流も多かったようです。

小串、千鳥、栗田に出て、出雲に通じる道です。



硫化鉄鋼が産出された鉱山です。

大茅の銅山も、昔は大賀谷銅山、その後 高丸銅山、矢神鉱山と次々と名前が変わっております。

明治17年に坂藤鉄太郎・安田芳平・安田喜作という人によって発見されたものです。

岩樋鉱山は、硫化鉄を産出し、長い間緑礬（ロウハ）を製造し、ベンガラの原料として吹屋に運ばれました。

岩樋鉱山は、安田藤三郎という大茅の人が発見したということです。



矢田の荒堀集会所の近くの道しるべです。

右 おぐし ちどり

左 あわた おぬか

嘉永6年10月 とありますから160年前に建てられたのものです。

右は、倉木、大茅を経て小串、千鳥、へ

左は、倉木を経て栗田、小奴可へ通じる。

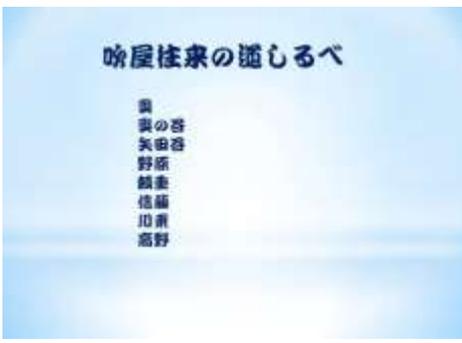
上神代雨請山の砂鉄は、この道を通って栗田のたたらに送られました。

この道しるべの中央に刻まれている「南無阿弥陀仏」の文字は、阿弥陀如来を祈る言葉です。

阿弥陀如来は、西方十万億土にある極楽浄土に住むといわれる仏で、この如来を念仏するものは、この世の生を終わって極楽浄土に行き、無限の生を受けることができる。という極楽往生できるというものです。



岸本と栃峠の境界付近の旧道にある道しるべです。  
 場所は、山の中に入るので、地元の人でも分かりにくい場所です。  
 右の道は、岸本部落に出る。  
 左は、東城町野組を経て町に出る。ものです。



次に吹屋方面の道しるべについて紹介します。  
 吹屋方面の道しるべは、沢山あります。



初めに  
 矢田の奥にあります。道しるべです。  
 左に進めば奥の谷に入りスゲガ峠を越え、神郷の釜谷に出て、  
 哲多の奈良の木から宮川内に出、河本ダムの下の川の瀬に出る。  
 ここからは、高瀬舟で、木材、木炭、マキなどを積んで松山、  
 倉敷、玉島方面に運ばれました。  
 帰りは、塩を積んで帰りました。  
 年貢米もここから運ばれました。  
 右に進めば、荒戸山の麓を通り、田淵、矢戸、本郷をへて吹屋  
 に出ます。  
 昭和53年新見市の文化財に指定されております。



先ほどの道しるべを大谷に進んでいくと  
 矢田の奥の谷横路という所にある道しるべです。  
 右 やまみち  
 左 かわのせ道  
 為牛馬安全供養塔に刻まれています。  
 于時明治2稔己巳（つちのとみ）4月吉辰とあります。  
 今から144年前です。  
 この辺りは、昔は牛馬の放牧場で、毎年供養塔前の広場で牛馬  
 の安全祈願が行われていた。ということです。  
 ここから左に進めば、川の瀬に通じるものです。



次に矢田谷にある道しるべです。

明治12年己卯（つちのとう）3月5日建立 ですから  
134年前です。

施主 大願主 池田平蔵 矢田谷中 とあります。  
道路改良のとき、供養塔などが一か所に集められております。



供養塔には、  
右 ほんごう ふきや  
左 やまみち と刻まれております。

右は、南北を経て、本郷へ、矢戸・吹屋に出ます。  
左は、山道ですが、山道を行くと新田・田淵部落に出ます。  
右に進み谷川に沿って右に折れると鯉が窪池にでます。  
道路改良により様子が変わっているようです。

鯉が窪湿原には、国の天然記念物に指定された植物群落があります。



途中に県指定の矢田の石仏があります。  
毎年、供養が行われております。  
仏門に帰依して入道の位を授けられた者が、極楽往生を祈念して建てたものです。

鎌倉時代中期の文永2年、今から748年前造立で、県下在銘石仏では、倉敷市真備町尾崎の石仏の寛元4年（1246）に次いで2番目に古いものである。



次に野原にある二つの道しるべです。

昨年、地元の方にご無理を言って案内してもらったのですが、所在が分かりませんでした。

明神山の麓を通る道だと思うのですが、どのあたりにあったのか分かりませんでした。



上にゆくと 八鳥  
左にゆくと 田淵  
向こうにゆくと 蚊家  
右にゆくと 野部 という道しるべです。  
哲西の道しるべによると

明神山の南の麓を通り、野原に達し、東に進むと南北、田淵の向う道と、八鳥から明神山の北側を通って蚊家に向かう道が交差するところ。だということです。

 <p>道しるべのある中央の山「明神山」</p>	<p>天保6年につくられたものですから 178年前のものです。      付近の様子です。      向こうに明神山が見えます。</p>
	<p>野原向こうにある道しるべです。      この道しるべも所在が確認できませんでした。      右に進めば 西山に行く      西山からは平川・高山・笠岡などに出ます。      左に進めば 蚊家・矢戸を経て吹屋に。      吹屋へは、毎日米や木炭が運ばれ、行き来したということ      です。</p>
	<p>川東の道しるべです。      この道しるべは、育野城の麓、大社教野馳教会所の下にあります。</p>
	<p>右 山道      左 ふきや道      元治乙丑（きのとうし）天四月吉日      「きのとうし」ですから、元治二年で、148年前です。      施主 谷中立之      右に進み谷川の橋を渡り、坂を登れば高野部落に行きます。      この道しるべができた頃は、山道であったようです。      左の教会所の前を通って坂を登ると信藤部落に出ます。      信藤部落から西山・吹屋に通じる。道です。</p>
	<p>途中の金光寺があります。      金光寺には、市指定の木造阿弥陀仏像があります。      平安時代末から鎌倉時代初期の作と推定されています。        阿弥陀は、西方十万億土のかなたにある極楽浄土の教主で、この仏を念ずる者は、死後必ず極楽へ行って生まれ変わることができるという。これが「極楽往生」ということで、この世を終えて</p>

も、必ず極楽浄土へ行き、永遠の生を受けるといふ。この仏は、信者の臨終のおり、たくさんの仏を引き連れて、迎えてくれる。ということです。



頼重の道しるべです。

頼重には、二つの道しるべがあります。

一つは、 右 西山  
左 吹屋

明治28年正月吉日

長谷川清吉

県道「大野部備中線」の途中にあります。

これが置かれている場所は、「哲西の道しるべ」によると大野部の四王寺前から来た道が、大野部備中線と出会う所と書かれています。

右に行くと西山に出、西山・平川・高山（こうやま）・笠岡に通じます。

左に行くと、蚊家・矢戸・吹屋に行きます。

明治28年の造立ですから118年前のことです。



頼重のもう一つの道しるべ

赤田の道しるべです。

右は 成羽道

左は 蚊家道

文化六巳四月吉日 204年前に立てられたものです。

二つの道しるべとも、道路の改良によって場所が変わっているようです。

哲西の道しるべによると

赤田というのは、このあたりの岩が赤紫色凝灰質岩（せきししよく ぎょうかいしつがん）で、田んぼの土も赤紫色（あかむらさきいろ）（マゼンダ）の色をしているところから、赤田と呼ばれていると書かれています。

左に行けば、青木峠を越えて蚊家の青木に出。

青木から金ボタルの天王八幡神社のそばを通り、矢戸・吹屋に行きます。

右に行けば、信藤をって西山に行く。



道路改良により馬頭観音や牛馬安全の供養塔が一か所に祀られています。



近くに新見市指定の重要文化財「四王寺仁王門」と「仁王像」があります。

四王寺は、弘仁年間(810~823)に玄賓僧都により開山された、古いお寺です。

嘉永2年(1849)火災によりお寺は焼失しましたが、仁王門と仁王像は、難を逃れました。



仁王像です。

寄木つくりで、着色され、たくましい筋肉を表現した立像で、土踏まずの部分に元禄14年(1701)の銘があります。

仁王像は、寺域(じいき)と仏法の守護神とされ、右の仁王像は口を開き、左の仁王像は口をとじています。

阿・吽の呼吸を表しております。



信藤の道しるべです。

右は 西山 瀬河内 平川道

左は 吹屋 成羽 岡山道

施主 惣社 斉藤平助

世話人 組中

信藤と西山の境界にあります。

昔、惣社の斉藤平助という人が道に迷って困っていたところ、親切にしてもらい助かったと、道しるべを立ててほしいと、金子を置いて帰った。

信藤の人たちが道しるべを作ったと伝えられています。

高山(こうやま)の麓を下れば、西山に出、坂を下って瀬河内・平川・高山・笠岡と通じています。

以前は、笠岡の神島参りの道でもあった。ようです。

高山の中腹の道を行けば、吹屋に行き、成羽・岡山に通じます。

八鳥から吹屋の銅山へ木炭や米を馬に積んで毎日この道を通ったものです。

東城の牛市で買った牛が何頭も成羽・岡山方面についでいかれました。



信藤の薬師堂です。  
観音寺の末寺として文久4年、今から149年前  
信藤広恵と高田慶三郎という人が建てたものです。  
本尊は、石造薬師如来座像で、文久3年当地谷中の講組（世話  
人 新屋浅五郎さん）により安置されたものです。  
像の裏には、「目のかすみやがて晴れ行位口山 これこそ日本  
一の畑の寺」と刻まれており、眼病平癒の仏様です。



これは、高野の道しるべです。  
右は 野部  
左は 河内  
田藤栄太郎  
道路改良によって、現在の場所に移されたということです。  
右は、高野から九竜谷を下って、川南に出る。  
左は、権現山の北の麓を越え、備後の高野を経て、東城の河内  
に出る道です。



高野地区には、市の指定の重要無形民俗文化財のよかひの行事  
があります。  
春祭りのカメの中に水と白米一握りを入れ、半紙で塞ぎその上  
に石蓋をし、土の中に埋めておく。  
翌年の祭りに取り出し、亀の中の状態によって、その年の豊作を  
占うものです。  
「世の中の様子を推測する」ということから「世量り」の名前が  
付けられているということです。  
これで道しるべの紹介を終わります。  
哲西地区には多くの道しるべが残されております。  
これらの道しるべは、古代の交通の様子を知るうえで、大変貴  
重なもの。  
ぜひ各地に残る道しるべを大切に保存して、後世に伝えて頂  
きたいと思います。